 ©2007 筑波大学生物学類

特集：大学説明会

平成 19 年生物学類大学説明会を終えて

鞠子　茂（筑波大学　生命環境科学研究科）

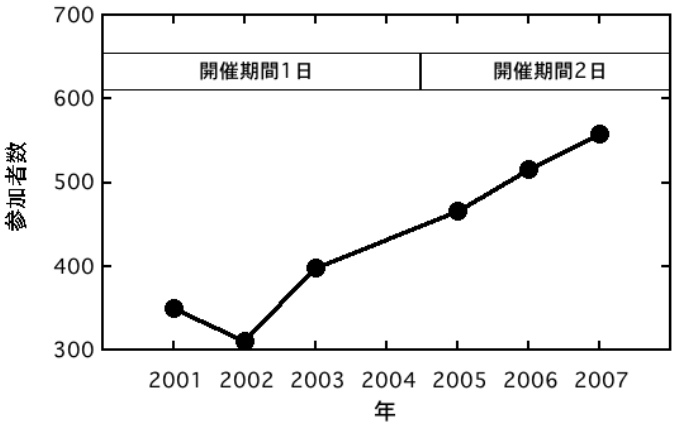
はじめに

今年も真夏の 8 月 1・2 日に生物学類大学説明会が開催され、昨年と同様に、午前中は教員による生物学類説明会、午後からは学生による生物学類説明会と研究展示説明会（研究展示、模擬講義、研究施設見学コース）が行われました。前日の準備と合わせて 3 日間にも及ぶ説明会でしたが、天気にも恵まれ盛況のうちに終わることができました。これも 80 余名に及ぶ教員、大学院生、学類 TA、事務職員のご協力があった賜物であり、皆様に心からお礼申し上げます。

以下に、来年の生物学類大学説明会がさらに充実したものになることを期待して、今年度の説明会の概要と改善すべき点についてまとめることにしました。

参加者人数

おかげさまで、昨年より 43 名増の 559 名（1 日目：289 名、2 日目：270 名）もの参加者を迎え入れることができました。ここ数年の参加者人数の推移を見ると、参加者は確実に増加していることがわかります（下図参照）。これは関係者の皆様の様々な努力の結果だと思います。たとえば、開催期間が 1 日のときは 300 名から 400 名の間を推移していましたが、2 日間に拡大してからは 450 名以上の参加者があり、開催期間拡大の効果が歴然と現れています。また、2 日間に拡大してからも増加は直線的であり、このまま行くと来年は 600 名の大台に乗る勢いです。少子化と逆行するこの増加傾向の原因が何であるのか、さらなる参加者の獲得を目指すなら一度分析してみる価値がありそうです。ちなみに、今年の増加は 2 日目の見学者が 40 名も増えたことによります。



生物学類大学説明会参加者人数の推移

今年度の大学説明会で目指したこと

大学説明会の基本的な企画・運営は大学説明会委員会（7 名の教員）によって行われています。さらには、学類生の TA の意見なども随時取り入れながら、よりよい大学説明会を目指して企画・運営を進めています。

昨年度は「参加する高校生たちの目線で大学説明会を企画・運営する」という基本方針を立て、見学者へのアンケートや学類新入生へのアンケート結果を参考にしていくつかの改革が行われました。例えば、説明会の内容の全体像と個々のつながりが分かるように説明会の進行に工夫を加えたり、配布する資料を分かりやすくしたりしました。その改革は概ね好評でしたので、今年度も同様の工夫をしながら企画・運営を行いました。

今年度行ったもう一つの改革は、午後に行われる研究展示・模擬講義・施設見学に関してスムーズな準備と進行ができるように工夫したことです。毎年、こちらのアナウンスの不十分さから、研究展示の準備過程で担当教員の皆様にご迷惑をお掛けすることが多々ありました。今年度は展示やポスターの設置に係わる場所、時間、方法（使用する物品など）について分かりやすいアナウンスをさせて頂いたつもりです。おかげで混乱は少なくなったようです。また、模擬講義への参加者の積極的な勧誘、施設見学者の人数制限なども工夫を加えました。その結果、例年より模擬講義の参加者が増え、施設見学もスムーズに行われました。

教員による生物学類説明会（10：00− 11：30、会場：2H101）

午前中の説明会は朝 10 時から行われました。幸い、例年より気温が低く、バス停から会場までの誘導はピストン輸送で順調に行われました。ただ、今年は 9 時前から訪れた参加者もいたりして、少し早めの誘導が必要でした。また、1 名ほど気分を悪くした参加者がおりましたが、大学事務の方に連絡して適正に処置出来ました。

教員による説明会は例年通り佐藤学類長の挨拶から始まりましたが、その後、5 分間ほどの時間を使って、配付資料の説明、説明会全体のメニュー、休憩や昼食の取り方についてパワーポイントで説明しました。この説明を加えることで参加者が 1 日をどのように行動したらよいのかが分かるようにしました。その後、入学試験の説明（山岸）と教育課程・進路の説明（濱）がビデオを交えながら行われました。最後に、2009 年に本学で開催される国際生物学オリンピックの宣伝が沼田先生より行われました。ぜひ生物学類に入学してオリンピックに参画して欲しいと熱く語られたことが強く印象に残りました。

学生による生物学類説明会（12：30− 13：35、会場：2H101）

昼食後に行われた学生による生物学類説明会では、授業体験（東、森本）、生活紹介（石川、和田）、マンチェスター留学

体験（大澤）、受験体験（宮地、川辺）が紹介されました。また、昨年から始めた学生による司会（塩谷、藤田）も行われました。ほとんどの学生がパワーポイントを使うなど、創意工夫した話をしてくれたので、高校生達は興味深く聞いているようでした。前日の練習も大きな効果があったようです。ただ、全体的に時間が押し気味で、昨年活発に行われた質疑応答がなかったのがちょっと残念でした。しかし、HP やパンフレットでは知り得ない生の情報は高校生にとって貴重であるように見受けられました。

研究展示説明会（13：35－ 16：30、研究展示・模擬講義会場：総合研究棟 A、コース：遺伝子実験センター・TARA センター・総合研究棟 A）

教員と学生の生物学類説明会終了後、午後の研究展示、模擬講義、施設見学コースの説明会が行われました。専門用語をできるだけ避け、平易な言葉で書かれた研究紹介パンフレットを見て参観者達は思い思いに見学してくれたように見受けられました。

○研究展示・ポスター

研究展示は今年で 4 回目ですが、研究室ごとの努力によって年々アトラクティブな内容へと変化しているようでした。高校生だけでなく付き添っている家族の方にも大変興味深かったとの意見を多数頂きました。

研究展示は見学者だけでなく大学側にもメリットがあるように見受けられました。研究内容を一般の人に説明するには十分な理解が必要であることから、説明を行う院生にとって貴重なトレーニングの場を与えているようでした。

昨年の反省点として掲げた展示設置のためのテーブルや機材に過不足についても問題がなかったようです。しかし、今後改善すべき点もいくつかありました。その一つは、場所によって参加者が集まりやすい展示と集まりにくい展示があったことです。ある程度は仕方がないにしても、場所による分野見学者の濃密は今後改善しなければならないと思います。たとえば、展示場所はおおよそ分野ごとに分けてありますので、毎年ローテンションで分野ごとに場所を変えていくことが必要かと思います

○模擬講義

模擬講義は公開講義室において 3 人の教員（和田、沼田）によって行われました。講義室を覗いてみると、活発な質疑が行われていたようで、大変好評であったと思います。昨年の「反省会」でも議論された聴講する高校生が時間とともに減っていく現象は今年は大分改善されたように見受けられました。呼び込み要員を配置するなどの工夫をした結果だと思います。また、昨年より講義の数が 1 つ減りましたが、参加者への負担を考えると講義 2 つは適正であったと思います。

○施設見学

施設見学は今年大きな変更点がいくつかありました。一つは、見学する建物（センター、総合研究棟）ごとにコース分けしたことです。その結果、コースの数に変更はありませんでしたが、コース名は遺伝子実験センターコース（鎌田・小野、中村）、先端学際領域研究センターコース（田中、谷本）、総合研究棟コース（酒井・佐藤・岩井・吉川、小林・橋本（義））へと変わりました。また、昨年の反省会のとき大きな問題となったコース参加者の過剰集中を改善するべく、チケット制を新たに導入することになりました。これは予め予定人数分（1 コース 20 人）のチケットを配るとともに、色分けシールによる確認作業を行うという新たなシステムです。このシステムによって、今年は参加者と担当者双方からのクレームもなく施設見学をして頂くことができました。

○ 相談所・休憩所

今年は、例年よりも充実した相談所を設け、入学や学類に関する質問を受け付けることにしました。午前中の説明会だけでは理解できなかった点やプライベートな質問に対して、できるだけフォローアップすべきだろうとの考えからそのようにしました。昨年よりはスペースを大きく取り、質問内容に応じて 4 つのコンパートメントを設けて、回答する教員と学生を配置する工夫をしました。その結果、熱心な参加者が訪れて、教員や学生と膝をつき合わせて話をすることができたように思います。

今年は昨年まで休憩室として使用していた部屋が使えなかったため、休憩室は農林学系棟の方に設置することになりました。研究展示を行っている総合研究棟から離れているので、利用者は昨年よりも減ってしまいました。そのことは事前に予測出来たことなので、あらかじめ総合研究棟内に休憩のための椅子を要所要所に配置することにしました。これは大変好評で多くの参加者に利用して頂くことができました。

おわりに

生物学類大学説明会は年々充実した内容へと変化してきました。見学者が増加してきたことは、その成果の現れと見ることができます。これはすべての関係者の努力の賜物ではありますが、とくに、貴重な時間を割いて会議を重ね、説明会の企画・運営に携わった大学説明会委員会のメンバー、事務の方々、学類 TA の皆さんが果たした功績は大いに評価されるべきだと思います。一方で、少子化に伴い参加者の減少が危惧されている状況を考えると、春と夏の大学説明会の企画・運営は今後も進化していかなければなりません。したがって、今まで以上に、大学説明会委員会が担う役割は増大していくものと思います。今後の大学説明会委員会は、毎年残される問題点を克服していくことはもちろんですが、新たなアイデアで説明会を盛り上げていく努力も必要になるでしょう。このような状況に対応できるように、今後は委員会そのものの構造改革も必要になってくるでしょう。昨年も同特集で述べたことですが、毎年 1/3 程度の委員の入れ替えを行って新しい血を導入し、これまでにない斬新なアイデアを取り入れていくことが重要だと思います。

Contributed by Shigeru Mariko, Received August 24, 2007.